

PP118061 胃癌患者における末梢血単球由来樹状細胞の術前機能評価に関する検討

奥沢正昭, 篠原 尚, 小林稔弘, 豊田昌夫, 谷川允彦
(大阪医科大学一般・消化器外科)

近年, 樹状細胞を用いた治療法が開発されたが, 胃癌患者由来の樹状細胞がどの程度特異的免疫能を誘導しうるのであるのかについての検討はなされていない。(目的) 健康人および胃癌術前患者から採取, 誘導した樹状細胞の機能評価を行い比較した。(方法) 健康人(n=5)および術前早期胃癌患者(n=14)から採取誘導した未熟DCを以下の測定を行った。1) 培養上清中のサイトカイン測定。2) 表面抗原。3) FITC-Dextran 取り込み能。4) アロMLRによる³H-thymidine uptake。5) 大腸癌細胞株HT-29に対するT細胞傷害活性(CTL)。(結果) 健康人に比し, 胃癌患者から採取誘導したDCにおいてCD86, CD83, HLA-DR発現は若干の減弱をみた。また, HT-29に対するCTL活性では有意に胃癌患者群で低下した。(p<0.05)(総括) 早期胃癌患者から誘導したDCは, 抗原提示の特異性に欠く事が示唆された。

PP118062 進行胃癌における腹腔内NK細胞, NK type T細胞の比率およびIFN- γ 産生能に関する検討

帖地憲太郎¹, 市倉 隆², 関 修司², 間嶋 崇³, 川端利信³, 松本 淳³, 小野 聡³, 平出星夫³, 望月英隆³

(防衛医科大学第1外科¹, 防衛医科大学研究センター外傷研究部²)

(目的と方法) stage III, IVの胃癌患者18名を対象に腹腔内のIFN-g産生能を有するNK type T細胞(CD56T細胞, CD57T細胞)について検討。腹腔洗浄液中リンパ球を分離, NK細胞, 両NK type T細胞の比率を解析。抗CD3抗体, サイトカイン(IL-2, IL-12, IL-18)で刺激しIFN- γ 産生能をELISAで測定。(結果) NK細胞, 両NK type T細胞の比率は腫瘍の進行とともに増加した。抗CD3抗体刺激によるIFN- γ 産生能はCD57⁺T細胞の比率と正の相関がみられたがサイトカイン刺激によるIFN- γ 産生との相関は認められなかった。(結論) 進行胃癌患者腹腔内ではNK細胞, NK type T細胞が増加していたが, サイトカイン刺激に対する反応性の低下が認められた。

PP118063 担癌状態の末梢血T細胞機能不全に感ずる検討

高橋章弘¹, 河野浩二², 飯塚秀彦³, 藤井秀樹³, 関川敬義³, 松本由朗³

(山梨医科大学第1外科¹, 東京通信病院外科²)

【目的と方法】胃癌担癌患者のT細胞機能低下の機序について評価すべく, 末梢血T細胞のCaspase 3活性, Apoptosis 導入率, TCR ζ 分子発現率をflow cytometryで, IFN γ , TNF α 産生量をELISA法で定量化した。早期癌10例, 進行癌12例と, 健常者14例を対象とした。【結果】末梢血T細胞のCaspase 3活性, Apoptosis 導入率とも進行癌では健常者より有意に上昇し, またTCR ζ 分子発現率, サイトカイン産生能とも進行癌では健常者より有意に低下していた。【まとめ】胃癌担癌状態の末梢血T細胞においてCaspase 3活性上昇, Apoptosis 導入率上昇, TCR ζ 分子発現率低下, サイトカイン産生能低下を同時に来すことがわかった。

PP118064 胃癌患者におけるinterleukin-6(IL-6)依存性全身性変化の指標としての血中免疫抑制酸性蛋白(IAP)値の意義

生田真一, 三木誓雄, 小出 章, 登内 仁, 楠 正人
(三重大学第二外科)

目的・方法: 胃癌78症例の血清IAP値を測定し, 全身状態を反映する指標としての有用性ならびに腫瘍組織中のIL-6濃度との関連について検討した。結果: 1: 血清IAP値はBMI, 血清albumin, cholinesterase値及びリンパ球比率と負に相関していた。2: IAP値は腫瘍径と正に相関し, 漿膜浸潤, 肝転移およびstageとの間にも有意な関連がみられた。3: cut off値410 μ g/mlを対象を2群に分けた場合, 3生率はIAP陽性群で有意に不良であった。4: 腫瘍組織中IL-6濃度はIAP値と正の相関を示した。まとめ: 1: 胃癌患者の術前血清IAP値は癌の進行度のみならず患者の栄養状態を反映していた。2: 血清IAPの誘導に腫瘍由来のIL-6が関与している可能性が示唆された。

PP118065 胃癌におけるCEAと糖鎖関連抗原(CA19-9, SLX, STN)の腫瘍マーカーとしての臨床的意義

田中淳一¹, 利野 靖², 蓮尾公篤², 米山克也², 川本昌和², 高梨吉則², 塩沢学², 高橋 誠², 今田敏夫²
(横浜市立大学第一外科¹, 横浜市立大学附属市民総合医療センター消化器病センター²)

【目的】糖鎖関連抗原(CA19-9, SLX, STN)の臨床的意義について検討する。【対象および方法】1992年9月より1998年12月までに手術した胃癌症例145例を対象とし, 末梢血および門脈血のCA19-9, SLX, STNを測定し検討した。【結果】腫瘍マーカーの陽性率はStageの進行とともに高かった。STN陽性例でn2以上とリンパ管侵襲の比率が高かった。STNを除き末梢血および門脈血のCEA, CA19-9, SLX, は有意に相関した。Stage3A, B, Stage4における各種腫瘍マーカーの陽性-陰性例の生存率に有意の差はなかった。腹膜再発18例, 肝転移8例, リンパ節転移3例であった。25例に再発に前後してCEAおよび糖鎖抗原のいずれかの陽性を, 2例にSTNのみの, 1例に糖鎖抗原のみの陽性を認めた。【まとめ】再発の指標として, 糖鎖抗原は, CEAを補う可能性が示唆された。

PP118066 微量癌細胞検出のための特異的遺伝子マーカーの検索

住吉康史, 徳永えり子, 芝原幸太郎, 古賀 聡, 木村和恵, 梶島 章, 織田信弥, 高橋郁雄, 前原喜彦, 杉町圭蔵

(九州大学大学院消化器・総合外科(第2外科))

【目的, 方法】微量な癌細胞の微小転移は, 従来の方法でスクリーニングする事は不可能である。微量癌細胞検出をリアルタイムRT-PCR法を用いてヒト消化器癌, 乳癌細胞株, 線維芽細胞株におけるCK18, CK19, CK20, CEA, Drg-1 mRNAの発現を比較検討した。【結果】1) CK18, CK19の発現は全ての癌細胞株において高かった。2) CK20は癌細胞株に特異的に発現していたが, その発現量は低値であった。3) CEAの発現は全ての癌細胞株で特異的に高く, 癌細胞株間での発現量の差においても大きかった。4) Drg-1は癌細胞特異性は低かった。【総括】正常細胞株と癌細胞株の発現の差はCK20が最も大きく有用であると考えられる。しかし他の癌細胞株より発現量が低く検出感受性に問題がある。また, CEAは癌細胞株間での発現量の差が大きく遺伝子マーカーとして有用でない。

PP119001 進行食道癌に対するmetallic stentの有用性について

濱辺 豊¹, 生田 肇², 中村吉貴³, 黒田嘉和³, 富田 優³

(神戸大学第一外科¹, 三木市民病院放射線科²)

【目的】切除不能食道癌で狭窄や瘻孔症例に対して, metallic stentを挿入し症状の緩和を計っており, その有効性および合併症について検討した。【対象と方法】2000年12月までに当院でmetallic stentを留置した食道癌症例で, 狭窄13例と瘻孔13例の計26例を対象とした。年例は65.5才で, 男女比は21:5である。瘻孔は気管4例, 縦隔6例, 右肺3例である。stentの種類は自作の被覆Z stent13例とUltraflex13例を使用した。【結果】摂食状況では狭窄例の全例で改善し, 瘻孔例では11例で粥以上を摂れた。早期合併症では疼痛6例, 気管損傷1例で, 遅発では逸脱3例, 出血2例, 再瘻孔形成2例であった。生存期間は狭窄例で平均6.9週で, 瘻孔例で平均10.6週と予後不良であったが, 1年以上の長期生存例も2例あった。【総括】挿入手技が簡便であり, 切除不能食道癌症例のQOL向上に有用であったが, 合併症の頻度も高くstentの種類, 内径等を考慮すべきである。

PP119002 食道ステント症例の検討

佐野 渉, 田代重彦, 外川 明, 知久 毅
(上野総合病院外科)

【目的】切除不能食道癌に対する食道ステント挿入例につき検討した。【対象と方法】1998年4月から2001年1月までにステントを挿入した6例を対象とし(1例は癌により左主気管支閉塞を来していたため食道, 気管のダブルステント挿入), 挿入後の自覚症状, 経口摂取状況, 食道逆流症状や生存期間を検討した。【結果と考察】男性5例, 女性1例, 占拠部位は中部が5例で腹部が1例であった。ステント挿入前には6例中5例につかえ感, 嘔気, 嘔吐等の自覚症状を認めていた。残りの1例は食道気管支瘻による咳嗽を認めていた。ステント挿入後の平均生存期間は46.7日で, 特に食道, 気管のダブルステント挿入例は, 挿入後4週間で外来通院可能となり, 現在挿入後2ヶ月をすぎているが外来にてフォロー中である。ステント挿入後の自覚症状の改善は6例中5例に認められ, 経口摂取は6例中5例で可能になった。また5例が中部食道のステント例にも関わらず, うち2例で逆流感を認めるようになった。今後は逆流症状をおさえるタイプのステントが望まれる。